

# 18世紀書簡体小説論

——虚実の境をさまよう物語——

深澤彩 FUKAZAWA Aya

## 序章 これまでの書簡体小説研究について

論者はこの論文において、18世紀の書簡体小説『パミラ、あるいは淑徳の報い』、『新エロイズ』、『危険な関係』の三作品の特徴の分析による、書簡体小説特有の表現方法と、書簡体小説特有の「編者」という存在の解明、そして18世紀書簡体小説における現実の世界と虚構の世界（フィクションの世界）の間に漂う曖昧性、すなわち虚実の曖昧性について考えていきたい。

実は論者は、書簡体小説を読む度に何か引っかかるものを感じてしまう（最近では、ミハイル・シーシキン著『手紙』<sup>1</sup>に手こずった）。はっきり言おう。論者は書簡体小説を一回通読するだけでは、小説内世界の人物関係も、その人物の間に起こった事件の内容も、把握しきれないことが多いのだ。まず、書簡体小説はどれもが長い、大作だ。何度読み返しても、読み返す度に新しい事実を見つける。読み飛ばしていた箇所を見つける。事件をもう一度振り返ってみる。読み落とした事件の真相を知る。もう一度読む。この繰り返しである。書簡体小説を読んでいると、そのようなことばかりが起る。何度「もう降参だ」と匙を投げたくなったことか。いや、実際に何度か投げたかもしれない。論者が感じたような書簡体小説の難解さが、多くの人を書簡体小説から遠ざけているように思う。書簡体小説を知らない、読んだことがない、もしくは読んでみたものの途中で断念してしまった、というように。

論者も何度も匙を投げた。だが、その投げた匙をもう一度拾って眺めてみた。右から見て、左から見て、ひっくり返した。それを何度も繰り返して、今に至る。書簡体小説を読む度に感じる、この消化しきれないような引っかかりは何なのだろうか。書簡体小説を包

む靄を晴らすことはできないのだろうか。書簡体小説とは一体何を表しているのか。なぜ、作者はわざわざこんなにわかりづらい小説を書いたのだろうか。書簡体小説が「わからない」のはなぜなのか、理解しきれないのはなぜなのかを突き止めたい、そう思ったことが論者が書簡体小説を研究しようと決めた理由である。

書簡体小説を論じる前に、論者が書簡体小説のことを書簡体「文学」と呼んでいないことに、言及しておく必要があるだろう。論者が分析し論じたいのは、近代以降の小説というフィクション作品において、語りの文が全て書簡体つまり、手紙文で成り立っている作品である。フランツ・カフカやフォードル・ドストエフスキーや芥川龍之介等の実在した人物の、現存するノンフィクションとしての手紙の集合体である書簡集ではないのである。書簡体「文学」と表記すると、小説だけでなく、実在した人物の書簡集等のノンフィクション作品も含まれてしまうだろう。フィクションの書簡集とノンフィクションの書簡集、このふたつのジャンルを明確に区別し、混同しないために、論者は今回取り扱う三作品、書簡体（手紙文）のみ構成されているフィクション作品を、書簡体文学とはせずに、書簡体小説と表記することにした。

今までの書簡体小説に関する研究では、書簡体小説の形態（独唱型、二重唱型、合唱型というように）の分類や、手紙文が一体何を表現することに長けているかということに主眼が置かれていたと感じる。中川信著「書簡体小説」（1976年）<sup>2</sup>では、書簡体小説の定義と作品群の概観、書簡体小説の三つの形態の分類が非常に参考になった。しかし書簡体小説の特性として氏が挙げられている、「手紙は現在形で書かれる」ということも、当てはまる場合とそうでない場合があることは確かである。『パミラ、あるいは淑徳の報い』は、物語の途中からは手紙というよりは日記の形式に近くなるし、『新エロイズ』でも過去を回想する手紙が出てくる。手紙文だからといって、全てが現在という時間軸に属するわけではないようだ。また「編者とは不必要な手紙を省略する編集者といった演技を示す」という解釈も不十分であると感じるうえに、「編者」の必要性はここでは追求されてはいない。ドストエフスキー著『貧しき人びと』や、有島武郎著『宣言』、シーキン著『手紙』には「編者」による序文は存在しないうえに、「編者」は小説内には全く姿を現さない。「編者」は

18世紀書簡体小説特有の存在なのだろうか。なぜ、作者はわざわざ「編者」に姿を変えて小説内世界に現れるのだろうか。氏の論文ではその解明や分析がなされていない。

また、倉持三郎の「書簡体小説の方法——間接伝達の効果」(1969年)<sup>3</sup>でも、書簡体小説が特定の相手を想定して書かれたものであるがゆえに、読者は小説内世界の人物同士の対話を覗き見するという小説形式であるという見解はもっともである。しかし、やはり氏の論文からも「編者」の特殊性やその必要性を解明することはできなかった。

新保弼彬の「J.J.Engelの小説論と書簡体小説『ヴェルテル』」(1974年)<sup>4</sup>でも、書簡体小説の特徴の細かい分析を得ることはできなかった。また、論者が取り上げる三作品のあとがきや解説も同じく、「編者」の特殊性と読者の関係性や、書簡体小説でしか見ることができない特徴(後に分析する「盗み読み」、「なりすまし」、「手紙の紛失」)を詳細に取り上げているものはなかった。

論者は書簡体小説が書簡体小説であるための特徴とはっきりとした定義を設け、そして今まであまり触れられてこなかった「編者」という特殊な存在の解明、書簡体小説を読んだ際に感じる重層性と曖昧性の解明を試みたい。「編者」は単なる語り手でも、作者の演技でもない。そして書簡体小説が持つ特徴によって引き起こされる、通常の小説とは異なる現実の世界と虚構の世界(フィクションの世界)との重層性、虚実の曖昧性を詳しく分析していくことが、この論文の目的である。

書簡体小説には書簡体小説にしか表現することのできない特徴があるはずであり、それを分析することで書簡体小説とは一体どんな小説形態なのか、一体何を表現できるのか、なぜ作者は小説を書く際に書簡体という形式を採用したのかを考えていきたい。

また、「編者」という語り手でも小説内世界の人物の手紙文の書き手でもない、特殊な存在を現実の世界と小説内世界との関係も含めて、論じていきたいと考えている。18世紀のヨーロッパにおける手紙というアイテムの重要性や、手紙文が小説内世界に展開されることにより起こる現実の世界と虚構の世界(フィクションの世界)との関わりを解明していきたい。

- 1 ミハイル・シーシキン『手紙』2012年
- 2 中川信「書簡体小説」『フランス文学講座 第一巻 小説1』
- 3 倉持三郎「書簡体小説の方法——間接伝達の効果」『文学藝術』(2)
- 4 新保弼彬「J.J.Engelの小説論と書簡体小説『ヴェルテル』」『独仏文学研究』(24)

---

## 第一章 18世紀書簡体小説三作品について

---

### 第一節 18世紀書簡体小説を成立させた郵便制度

電話やテレビ、インターネットなどが発明され情報化が進んだ現代社会では考えられないことだが、かつては手紙が唯一の遠距離間における通信手段であった。一口に手紙と言ってもその歴史は古く、古代エジプトや古代ペルシアにまで遡ることができる<sup>1</sup>。かつて、手紙（と言ってもまだ紙が発明されていないので、粘土板やパピルスに書かれた）は、個人的な用件（私信）を伝えるためのものではなく、その土地を支配する統治者による軍事的内容が大半を占め、外敵の侵入や戦争の開戦の布告など、その地域社会の存亡に関わる重要な内容が主だった。

古代ペルシアでは、紀元前6世紀半ばに伝令制度が組織された。伝令制度とは、大勢の使者が駅伝（リレー）方式によって、あらかじめ定められた路線を馬もしくは人を用いて統治者の命令を伝達する組織的な制度であり、一定の距離ごとに宿場を設け、そこには伝令用の替馬が用意されていた。ダレイオス1世は「王の道」という幹線道路を造り、使者はそこを走ったと言われる。この伝令制度はペルシアの滅亡によって消滅したが、その構想はエジプトやギリシアに引き継がれ、後のローマ帝国の駅通制度に繋がる。ローマはヨーロッパのあらゆる地域にまで道路を延長、整備して、駅通制度を広げるがローマ帝国が滅亡してからは、中世に入るまでヨーロッパでは目立った郵便制度の発展はなかったようである。

イギリスでは、王の使者の制度が確立するのは12世紀以降のことであり、ノルマン朝（1066～1154年）のはじめに、その原型を見ることが出来る。手紙を届ける専門の臣下が、君主の手紙や公文書を手紙を運んでいたと考えられる。この王の使者の制度は、一般的な郵便制度が確立されるまで、王室や政府の文書を送達する唯一の制度とされ

ていた。

中世末期になると、ヨーロッパには各地に大学が開設されるようになり、読み書きの能力は聖職者たちの独占ではなくなる。教育への関心や産業の発達により、人々の生活圏も広がっていく。

フランスとドイツの大学においては、大学生が特別の郵便配達員や伝達者を用いて、家族と情報を交換し合っていたが<sup>2</sup>、イギリスにおいては、国の郵便制度は1635年まで一般の人々には公開されてはいなかった<sup>3</sup>。一般の人々は宛て先の人物の住所まで、召使いなどの使者を使って手紙を届けていたようである。また宛て先の住所の近くまで行く旅行者や他人の使者、兵士などに手紙を託す場合もあり、そのようにして遠方の知人と連絡を取り合っていたと考えられる。

フランスではルイXI世（在位、1461～1483年）が1464年に王室用の駅通制度を敷設した<sup>4</sup>。一方、イギリスの駅通制度が本格的に整備されはじめたのは、16世紀に入ってからである<sup>5</sup>。そしてこの駅通制度は政府だけでなく一般の人々にも広がり、彼らも駅通事業に乗り出すようになる。ロンドンには中央郵便局も開設され、そこから各地の宿駅まで郵便物が運ばれるようになる。

駅通通路の整備と拡張、またイギリスでは外国郵便のための郵便船の誕生により、手紙は国家のものから一般大衆が気軽に交換し合うことのできるものへと徐々に変化していったのである。

一般的に手紙の目的は情報の交換であり、新聞が誕生する以前の時代では、新聞に類した役割も担っていた。手紙は各地で起こった事件・事故等を知る重要な情報源であり、私信がサロンで公開されることや、不特定多数の人物に読まれることも多かった。また、都会に上京した子供と地方の親を結び、遠く離れた恋人同士の距離を縮める大切な絆でもあった。18世紀に入り、イギリスやフランスを中心に郵便制度が整備されると、手紙はより日常生活に欠かせないアイテムとなっていった。そして日常生活に役立つ模範書簡文集も発行されるに至る。後に分析していく『パミラ、あるいは淑徳の報い』の著者であるサミュエル・リチャードソンも、手紙における「模範基本文例集」を執筆しようとしたところ、構想が膨らみ『パミラ、あるいは淑徳の報い』という小説を書き上げるまでに至ったと言われている。

手紙は、遠方の家族や知人と連絡を取り合う唯一の手段であった。18世紀には既に郵便局が開設されていたが、それでも使者や召使いに手紙を宛て先まで届けさせることなどは、まだ日常的に行われていた。これから見ていく『パミラ、あるいは淑徳の報い』のパミラやB氏も、『新エロイズ』のジュリも、『危険な関係』のヴァルモンとメルトイユ夫人も使者や召使いに手紙を託すことが多い。そのため自分の手下や使者を用いて別人の手紙を横取りすることも可能だったようである。

手紙が情報伝達の唯一の手段であったこと、郵便制度が整備されていくに従い手紙が個人のプライベートな情報を伝えることにも使用されるようになったこと、しかし郵便制度は発展途中のため、個人のプライバシーが完全に保護されていたわけではないこと、このような社会的背景のほかにも、まるで他人の手紙を覗き見ているかのような小説形態である書簡体小説は、「他人の生活や手紙を覗き見したい」という人々の好奇心を掻きたてる心理的要因も含んでいたと考えられ、それが18世紀にかけての書簡体小説の流行に繋がったと考えることができる。

---

## 第二節 18世紀書簡体小説を取り巻く「読者」の変化

18世紀のイギリス・ロンドンにおいて、読書という文化が男性から女性へと移行していき、読書文化は女性という新しい「読者」を獲得した。イアン・ワットの『小説の勃興』には次のようにある。「上流の女性も中流の女性も男性のやることは、仕事であれ遊びごとであれ、ほとんど参加できなかった。普通、政治的活動や実業に、あるいは、財産の管理にたずさわることもなく、余暇に男たちが楽しむ狩猟とか酒盛りもできなかった。したがって女性には余暇が沢山あり、しばしば手当たり次第乱読して時をすごした」<sup>6</sup>。この背景には、ロンドンにおける中産階級の発展という経済面の大きな変化による、女性の家庭内での仕事の減少を挙げることができる。17世紀までは、夫婦、子供、祖父母、いとこ、より遠縁の親戚、召使いや使用人も家族に含まれ、そこでは家内工業が営まれ、生活に必要なものは全てその家庭内で生産していた。女性はその中でも、糸を紡いで布を織ったり、パンやビール等の食料品や、ろうそくや石鹼

等の生活必需品を作っていた。しかし18世紀に入り、たいていの必需品は大規模な工場で製造され、商店や市場で購入できるようになった。女性の余暇は増大し、多くの時間を様々な趣味にあてることが可能になったのである。

中産階級の女性の余暇は増加したが、貧しい市民や地方で働く者には、まだ読書という文化は程遠いものだった。しかしその中でも、裕福な家庭の奉公人と召使いという階層に属するものは、度々読書という機会に触れていたようである。屋敷には多くの書籍があった。『パミラ、あるいは淑徳の報い』の主人公パミラは、貧しい召使いの娘だが、奉公先の奥様に読み書きを習い、時間があれば読書や書き物をした。イアン・ワットはこの恵まれた召使いという特殊な階層に対してこう語る。「パメラは、こうして、余暇をもてる文学好きな侍女たちから成るきわめて強力な集団の一種の文化的英雄としてうけとられたことであろう」<sup>7</sup>。

余暇を持って余した中産階級の女性、また読み書きを習得した召使いという、「女性という新しい読者」たちに、小説というフィクション作品は歓迎された。女性という新しい読者の誕生と増加も、小説が多く読まれることになった要因のひとつと考えることができる。

---

### 第三節 三作品を取り扱う意義

18世紀の郵便制度の発展と、イギリスの産業発達による女性を中心とした読書文化の誕生により、18世紀のヨーロッパ（特に、イギリスとフランス）において、小説というフィクション作品が読まれる環境が整いつつあった。郵便制度の発展と新しい読者層の誕生は、18世紀における書簡体小説という小説形式の流行を生み出す。では、そもそも書簡体小説とは一体何なのか。そして書簡体小説はなぜ18世紀のヨーロッパにおいて、多くの読者たちに歓迎されたのだろうか。

書簡体小説とは、近代以降に登場した小説というフィクション作品において、小説内世界の人物が同じ小説内世界の人物へと宛てた手紙によって、小説内世界での出来事および事件を読者に物語る形態を持つ小説と定義できるであろう。かつ、小説内世界の人物が手紙を書く際、特定の宛て先が存在し、それが小説内で明確に示され

ていることが重要な特徴である。

小説内世界の人物が特定の宛て先に書いた手紙が、物語の叙述の手段として用いられるということは、つまり書簡体小説とは語り手が不在の小説であり、地の文というものが一切存在しない小説とも言い換えることができよう。小説内世界の事件を全て見通すことのできる語り手が物語を語る、通常の小説とのもっとも大きな違いはこの点にある。

また書簡体小説において、手紙の書き手と読み手のほかに、序文や註釈などに「編者」という存在が現れることにも注目したい。「編者」は語り手とは異なり、「書簡集を編纂した者」として、小説の序文や註釈にその姿を現す。小説内世界の事件を詳細に目撃している語り手とは異なり、その存在感は希薄である。では「編者」の役割と必要性とは一体何なのか、「編者」という特殊な存在は何なのであろうか、この点も考えていきたい。

まず、書簡体小説にはどのような作品があるのか簡単に見てみよう。書簡体小説は、その小説の中に登場する人物の人数によって三つの形式に分類することができる<sup>8</sup>。第一の形式は、ただ一人の書き手が書いた手紙によって構成された小説であり、それは独唱（一声）型と言われる。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ著『若きウェルテルの悩み』（1787年）がこのひとつめの形式に当たる。

第二の形式は、作中で二人の人物が互いに手紙を書き交換し合う往復書簡の体裁を用いたもので、二重唱（二声）型と言われる。ドストエフスキー著『貧しき人びと』（1846年）、ミハイル・シーシキン著『手紙』（2012年）がこの形式に該当する。

そして第三の形式は、三人以上の人物が作中で手紙を書き交わすもので、合唱（多声）型と呼ばれる。例えば、ジャン＝ジャック・ルソー著『新エロイズ』（1761年）、コデルロス・ド・ラクロ著『危険な関係』（1782年）、有島武郎著『宣言』（1915年）がこの形式に当てはまるであろう。

小説が手紙で構成されているという点が、書簡体小説のもっとも重要な特徴であると前にも述べた。序文や註釈等に「編者」や、「編者」としての書き手の存在が垣間見えるとしても、その序文や註釈以外はほぼ小説内世界の人物の手紙だけで成り立っているものこそが、書簡体小説と呼ぶことができると論者は考えている。そのため、

物語の進展に手紙というアイテムが重要な役割を担っているとしても、手紙文とともに地の文が存在するもの、語り手が存在する小説を、ここでは書簡体小説には分類しないこととする。例えば、夏目漱石著『こころ』(1914年)は、作中で主人公が恩師の遺言を読む場面が登場し、その恩師の遺言がそのまま小説内で示される。では、『こころ』も恩師による独唱(一声)型の書簡体小説と分類することができるのではないだろうか。しかし、その遺言以外の場面では、語り手としての「私」の言葉が地の文を構成している点から、論者は『こころ』を書簡体小説には当たらないと判断する。またエドモン・ロスタン著『シラノ・ド・ベルジュラック』(初演1897年)も、小説の物語の進展に、主人公シラノが恋人ロクサーヌへと宛てた手紙が重要な役割を果たす。だが『シラノ・ド・ベルジュラック』は脚本として書かれた点も含め、手紙文以外にも、会話であったりト書きがあったりと、やはり手紙だけで小説が構成されているわけではないため書簡体小説とは大いに異なっているのである。その点、これから論者が扱う『パミラ、あるいは淑徳の報い』、『新エロイーズ』、『危険な関係』の三作品は、小説内世界の人物が書く手紙と、「編者」による序文と註釈だけで構成されている。まさしく手紙・書簡だけで出来上がった小説、書簡体小説ということができるのである。では、これからその三作品の細かい分析に入る前に、その三作品を概観してみよう。

リチャードソン著『パミラ、あるいは淑徳の報い』(1740年、以下『パミラ』)は、主人公パミラが両親に宛てて書いた手紙を中心に構成されている。召使いの少女パミラは美しい容姿のため、雇い主である貴族のB氏に執拗に追い回される破目に陥る。B氏は庭先でパミラに無理矢理口づけをしたり、クローゼットに隠れてパミラと他の召使いの言動を盗み見たりと、様々な策を弄してパミラを手に入れようとする。そんなB氏に恐れをなして両親のもとへ帰ろうとするパミラを逃さないために、B氏はパミラを田舎の屋敷に監禁する。B氏や彼の手下の恐怖に耐えながら、パミラは純潔を守り通すために彼らに対抗する。

そのような監禁生活の中において、パミラの唯一の慰めは両親に宛てて手紙をしたためることであった。パミラは日々の苦しい生活の様子や、その中で自分が考えたこと、またB氏やその手下の暴挙

を余すところなく手紙に書き連ねていく。ある日パミラは、B氏が川で溺れたという知らせを受ける。宿敵が死んでしまえば自由の身になることができるのに、パミラはB氏の無事を願う。B氏はパミラが自分の命を案じてくれたこと、そして彼女の優しさと神への信仰心を彼女の手紙を盗み読むことで知る。パミラの手紙に感激したB氏は心を入れ替え、パミラを正妻として迎えることを決意する。

小説の中には、パミラが両親に宛てて書いた手紙のほかにも、パミラの父親からパミラへ宛てて書かれた返事や、パミラの雇い主であるB氏からパミラに宛てた手紙なども挿入されている。小説の後半で、パミラの手紙は一通一通が非常に長く、日記調に変化していく。しかし、パミラはその日記を書くにあたって両親がいつか自分の文章を読んでくれることを念頭に置き、両親に宛てて両親に語りかけるように文章をしたためている。両親という特定の宛て先が存在するという特徴によって、『パミラ』は日記小説ではなく書簡体小説であると論者は判断した。また、書簡体小説の形式としては、独唱（一声）型と合唱（多声）型の間位置すると考えることができるであろう。パミラによって書かれた両親宛ての手紙群の合間に、他の人物の手紙が挿入されている点では、手紙の書き手が複数人存在する合唱型と言えるかもしれないが、パミラ本人による手紙の分量が他を圧倒していることや、小説内世界の人物同士の文通、情報の交換という点が希薄なため、『パミラ』は、一人の書き手が書いた手紙で構成される独唱（一声）型の書簡体小説に近いと判断してもよいと言える。

ルソー著『新エロイズ』（1761年）は、スイス・ジュネーヴの貴族令嬢ジュリと、ジュリの家庭教師を任せられた平民のサン＝ブルーとの約8年間にも及ぶ恋愛の物語である。貴族令嬢であるジュリは、家庭教師のサン＝ブルーと恋に落ちる。従姉妹のクレールの助けもあり、サン＝ブルーとの逢引を続けるジュリであったが、サン＝ブルーとの結婚を許そうと考えていた母親は病で亡くなり、さらには貴族としての仕来たりや階級に固執する父親のデタンジュ男爵によって、ジュリはヴォルマール伯爵との婚約を決められる。ジュリの従姉妹のクレールは、ジュリとサン＝ブルーを引き離すことにする。クレールはサン＝ブルーを友人のイギリス人貴族のエドワード卿とともに、パリへと旅立たせる。失恋の痛手に苦しむサン＝プ

ルーとジュリであったが、クレールを介して文通を続ける。そのうち、ジュリとの結婚のためにヴォルマールがスイスを訪れ、ジュリとヴォルマールは正式に結婚する。ジュリを諦めきれないサン＝ブルーであったが、エドワードの勧めもあり、世界周航の旅に出る。

3年後、サン＝ブルーはスイスに帰国し、ジュリと再会する。ジュリは二児の母となり、立派な妻としてヴォルマールと家庭を築いていた。ジュリへの気持ちを断ち切れないまま、サン＝ブルーは、ジュリとヴォルマール、その子供、クレールとともに平穏な生活を送る。サン＝ブルーは、ジュリやその子供とクレールとの生活、ヴォルマールの人格について、ジュリとヴォルマールの家政の切り盛りの仕方などの詳細をエドワードに書き送る。

あるとき、サン＝ブルーはエドワードの仕事を手伝うためにローマへ旅立つ。サン＝ブルーがいない間も、平和な生活を送っていたジュリだったが、湖に溺れた子供を救うために自ら湖に飛び込み、病を患う。ジュリは病に苦しみながらも、募り続けた愛をサン＝ブルーへの手紙にしたため、若くして亡くなる。

『新エロイズ』はジュリとサン＝ブルー、そしてジュリの従姉妹のクレール、サン＝ブルーの友人のエドワードを中心とした四人以上の人物の手紙が、小説の主な構成要素となっている。そのため書簡体小説の形式としては、第三の形式の合唱(多声)型の書簡体小説に分類することができる。『新エロイズ』は、約8年間という長い年月にわたり、物語が展開していく。しかし、その8年間における全ての事件が描写されているわけではない。この小説にはある事件の欠落がある。その事件がどのような事件であったのか、読者そして「編者」は推測するしかない。その欠落を生み出したのが「手紙の紛失」である。この「手紙の紛失」によって小説内世界に何が起きたのかは、後に分析したい。

ラクロ著『危険な関係』(1782年)は、小説全体が175通の手紙で構成され、前の二作品と同じく序文と註釈以外は全て手紙が叙述の手段として使われている。主な小説内人物だけでも七人の人物が手紙を交し合っており、書簡体小説の分類としては第三の形式である合唱(多声)型と分類できる。

18世紀のフランス・パリの社交界にて、未亡人であるメルトイユ侯爵夫人は自分を捨てたジェルクール伯爵に復讐をするため、彼の

婚約者であるセシル・ヴォランジュを誘惑するよう淫蕩にふけるヴァルモン子爵に依頼する。最初、ヴァルモンはメルトイユ夫人からの依頼を断る。彼は田舎で隠居生活をする叔母のローズモンド夫人の友人で信心深いツールヴェル法院長夫人を手に入れようと画策している最中だったからである。一方、パリではセシルがダンスニーという青年騎士に恋心を抱くようになっていた。ダンスニーもセシルを愛しく想うようになり、二人は恋に落ちる。この二人の関係を利用しようとひらめいたメルトイユ夫人は、セシルの信頼を得ることに成功し、セシルがダンスニーとの恋にのめり込むように仕組む。何とかツールヴェル夫人を手に入れようとするヴァルモンだったが、ツールヴェル夫人に拒絶されてしまう。そのような中で、ヴァルモンはツールヴェル夫人に自分の淫蕩の経歴を暴き、警戒するように忠告した者がいることを知る。その人とはセシルの母、ヴォランジュ夫人であった。ヴァルモンは自分の恋路の邪魔をしたヴォランジュ夫人への復讐のため、セシルを誘惑することを決意し、メルトイユ夫人と本格的に協力関係を結ぶ。

パリではセシルがダンスニーとの関係を母のヴォランジュ夫人に知られてしまい、ヴォランジュ夫人は娘とダンスニーを引き離すため、セシルを連れてツールヴェル夫人とローズモンド夫人の住む田舎に移る。一旦パリに戻ったヴァルモンはダンスニーのもとを訪れ、セシルとの仲を取り持ってやろうと約束する。そして再び、ツールヴェル夫人を手に入れるため、そしてセシルを墮落させるためにヴァルモンが田舎の叔母の家に現れる。ヴァルモンはダンスニーとの恋愛を応援するという口実でセシルに近づき、首尾よく彼女を誘惑し処女を奪う。そしてヴァルモンから逃れようとパリへ逃げたツールヴェル夫人をも、ヴァルモンは恋する女へと変えることに成功する。

しかし、メルトイユ夫人とヴァルモンの企みを知ったダンスニーとの決闘でヴァルモンは敗北、死亡する。彼を陰で操っていたメルトイユ夫人もダンスニーが公表した手紙がもとになり社交界での地位を失ったうえに天然痘を発症し、オランダへ亡命する。ツールヴェル夫人はヴァルモンへの思いから狂死し、セシルは自分の行いを責め修道院に入り世を捨てる。

『危険な関係』は、全部で175通の手紙から成っており、メルトイ

ユ夫人、ヴァルモン、セシル・ヴォランジュ、その母ヴォランジュ夫人、ダンスニー、ツールヴェル夫人、ヴァルモンの叔母ローズモンド夫人の七人が手紙の主な書き手、宛て先、読み手である。そしてこの七人が事件の関係者でもある。物語は17××年8月3日にセシルが友人に送った手紙から始まり、翌年の1月14日にヴォランジュ夫人がメルトイユ夫人の破滅をローズモンド夫人に知らせる手紙で終わっている。このわずかな期間に様々な思惑が交錯、衝突し、最終的にはこの事件に関わった者のほとんどが何らかの理由で姿を消す。『危険な関係』では、『パミラ』と同じく「手紙の盗み読み」も多用されているが、より重要な特徴として「手紙のなりすまし」が登場するところに注目したい。

論者が『パミラ』、『新エロイズ』、『危険な関係』を取り扱う理由として、三点を挙げることができる。ひとつめは、前に論者が定義した書簡体小説としての体裁を、この三作品が持っているということ。ふたつめは、三作品の共通点として「編者」が序文および註釈に登場するという点。この共通点によって、通常の小説では見ることのできない「編者」という特殊な存在の謎を解明できるであろう。そして三点目は、書簡体小説でしか表現できない描写方法・手段を、この三作品は非常に効果的に利用しているという点である。

書簡体小説が通常の小説形態とどのように異なるのか、通常の小説では描くことのできない何を伝えることができるのかを語るうえで、必要不可欠な要素である上記の三つの特徴を、この三作品を取り扱うことで解き明かしていきたい。その特徴とは、相手の手紙を本来の宛て先に届く前に不正に横取りし、相手の手紙を盗み読む「盗み読み」。ふたつめは、差出人になりすますなり口授させるなりして、虚偽の手紙を生み出す「なりすまし」。そして三つめは、「手紙の紛失」である。この特徴が小説の物語展開に重要な役割を持ち、かつ大きな働きをしている作品を選ぶと、論者の選んだ三作品がもっとも的確であると考えられるのである。

- 1 星名定雄『郵便の文化史——イギリスを中心として』2ページ
- 2 高橋安光『手紙の時代』96ページ
- 3 星名定雄『郵便の文化史——イギリスを中心として』14ページ
- 4 高橋安光『手紙の時代』
- 5 星名定雄『郵便の文化史——イギリスを中心として』
- 6 イアン・ワット『小説の勃興』58ページ

## 第二章 手紙のもたらす効果

### 第一節 盗み読み

リチャードソン著『パミラ』(1740年)は、召使いの少女パミラが両親に宛てて書いた手紙で構成されている書簡体小説である。パミラは美しい容姿のため、雇い主であるB氏に執拗に追い回される破目に陥る。恐れをなして両親のもとへ帰ろうとするパミラを逃さないために、B氏はパミラを田舎の屋敷に監禁する。パミラは両親に宛てて書いた手紙の中で、B氏の暴挙の数々を告白する。

『パミラ』は、「編者」による序文と、パミラによる両親宛ての手紙によって構成されている。ときおり、パミラの雇い主であるB氏やパミラの父親からパミラへの返信、「編者」の註釈が入るが、小説の大半を占めるのは、パミラによって両親宛てに書かれた膨大な量の手紙である。ここでひとつ注意しておきたいことは、パミラの手紙の書き方が、彼女が監禁されてから変化することである。パミラがB氏によって田舎の別邸に監禁され、両親に手紙を送ることができなくなった頃から、パミラの手紙は一通一通が非常に長くなり、日々の出来事や気持ちを詳細に綴った日記調に変化していく。このことから、『パミラ』は日記小説として読むこともできると言ってもよいだろう。しかし、一般的に特定の読み手を想定して書かれない日記とは異なり、パミラは両親という特定の読み手を想定して文章を書いているという点から、パミラの文章は日記ではなく、手紙に近いと考えられる。よって『パミラ』は日記小説ではなく、特定の宛て先が存在する手紙で構成された小説、書簡体小説であると論者は判断した。

さて、『パミラ』という書簡体小説の中で、手紙は物語を語るほかにどんな働きをしているのであろうか。論者が『パミラ』で取り上げたい書簡体小説の特徴として「盗み読み」を挙げたいと思う。

貴族であるB氏は召使いのパミラを妾として囲おうと目論み、彼

女の行動や思想を把握・監視するために、パミラが両親に宛てた手紙を盗み読むことを思いつく。パミラがB氏によって監禁される前、まだ両親に宛てて助けを求める手紙を自由に送ることができた頃から、B氏によるパミラの手紙の「盗み読み」は始まる。パミラは私室に両親宛ての手紙をしまっていたが、ある日その手紙がなくなっていることに気付く。その手紙には、B氏がパミラに対してキスを迫った事件が書かれていたはずであった。

手紙を書くのをサボっていたわけではなく、彼が、じわじわと実に卑劣なやり方でその悪だくみを明らかにしていった様子をたびたび記していたのですが、誰かが私の手紙を盗んでしまい、行方不明なのです。長い手紙だったの。彼は、あることでひどい悪事を働いたのだから、手紙についても何のためらいもなく何か仕組んだのかもしれない。ともあれ、彼があの手紙をどう使おうと、辱めを受けるのは彼のほうよ、私はなんにも恥ずかしいことはないの！

上の手紙は、パミラが手紙を盗まれたことを知り、それを両親に伝え、かつ自分の身の潔白を訴える手紙の一節である。この手紙を見てわかるように、パミラは身分は低いが、読み書きの能力が高く、推理力や洞察力もある女性のようなのである。それに加えて、身分の差という偏見を持たない、誇り高い女性であることもわかる。

B氏はパミラが自分の脅迫や二人きりの対面にも臆することなく身を守ったことを、当初は召使いという分際で生意気だと気を悪くする。しかもB氏は、パミラが上の手紙のように彼の行動を逐一両親に隠さずに暴露すること、そして身の潔白を守るためになら、自ら屋敷を去ると言い出したパミラの信心深さや、権力に屈しない毅然とした態度に対しても、貴族としてのプライドを傷つけられ激怒し、何としてでもパミラを服従させたいと余計に彼女に執着していくようになる。

どんな脅しにも屈せず、自分の意思を貫こうとするパミラに業を煮やしたB氏は、パミラを逃さないために田舎の別邸に彼女を監禁する。そのような環境の中でも、パミラは両親に宛てて手紙を書き続ける。下の引用は、パミラが両親に宛てて書いた手紙の一節であ

る。パミラがB氏に呼び出され詰問を受けた場面を、パミラはB氏の喋った言葉を引用して詳しく記している。そのため括弧内の言葉は、手紙を書いているパミラ自身の感想であると考えることができる。

驚くかもしれないが、僕は君の手紙をずいぶん読んだ(これにはびっくり仰天です!)。君のすばらしい書きっぷりにほとほと感動したんだ。自由で気取らない、娘らしからぬ文章だ。こうしたことをすべて考え合わせて、さっき言ったように、君のことをものすごく好きになってしまったんだ<sup>2</sup>。[強調は論者]

このB氏の告白によって、パミラは彼が手紙を「盗み読み」していたことを確信する。B氏はパミラが監禁される前から、彼女が両親に宛てて書いた手紙を読んでいた。どんなに脅迫しても、彼女の態度も、両親へ宛てて書かれた手紙も権力に屈しない。そのようなパミラの「真実」を語り続ける手紙の言葉にB氏は徐々に心惹かれていく。

そして二人の間に決定的な事件が起きる。ある日、狩りの最中にB氏が川に落ち溺れかけたという情報をパミラは耳にする。そして両親に対してこう語る。

たった今耳にしたのだけれど、あの人が、数日前、狩りで獲物を追いかけている時に、川を渡ろうとして溺れかけたそうよ。私、どうしたのかしら。あんなにひどい仕打ちを受けているというのに、なんだかあの人のことを憎む気になれないの。確かに私、なんだか他の人と違うみたい! もう十分憎んでも当たり前だと思うのだけれど、あの人がたいへん危ない目に遭ったと聞くと、心の中では彼の無事を喜ばずにはいられない、彼がいなくなれば、私のこの苦しみが終わるというのにおね! (中略) 亡くなった奥様〔論者註、B氏の母親〕のためにも、あの人の無事を願わずにはいられない<sup>3</sup>。

もちろん、この手紙もB氏は「盗み読む」。そしてパミラは美しいだけでなく、聡明なだけでなく、心根が優しい人物であること

を知るのである。B氏はパミラの手紙を「盗み読む」ことによって、彼女の人間性を理解していったのである。

私のパミラ、君への愛情を押さえようともがいてみたが、無駄だった。君が行ってしまったからは、どうしてもあの君の書き物を読んで心を慰めるしかなかった。君がああ恐ろしい誘惑にかられ、ひどく傷ついたあとでジュークスさんから受けたひどい扱いとか、あるいは特に、僕が溺れそうになったことを聞いた時、君が実に優しく心配してくれたこととか（僕が死んでしまえば君は自由になれるわけだし、君がそう願っても仕方のないようなことを僕はしてきたにもかかわらず、だ）、また別の箇所でも僕への好意を告白してくれていることとか、僕のひどい扱いにもかかわらず、君は僕のことを憎めずにいたこととか、日記が実に美しく、穏やかで、純粋な気持ちから綴られているので、君が僕のことを愛していてくれるんじゃないかとそういういろいろなことを知るに及んで、僕は君と別れたことを後悔し始めた<sup>4</sup>。〔強調は論者〕

とうとうB氏は上のような手紙を用いて、パミラに自分の気持ちを打ち明ける。

B氏とパミラは何度も対面して会話を交わすが、その言葉は貴族と平民の差、雇い主と召使いの身分の差を縮めることはできない。パミラはB氏の前では常に召使いとしての身分をわきまえ行動している。両親宛ての手紙ではB氏のことを「あの人」や「彼」と表現するが、B氏の前では「ご主人様」と呼んでいる。B氏も貴族であり雇い主として、パミラに高圧的に接していた。

しかし、B氏とパミラが直接対面、または接触して、口頭で表現できない気持ちを、パミラは自分の両親宛ての手紙で余すところなく吐露する。

パミラはもちろんB氏においても、直接お互いの顔を見ながら率直な気持ちを表すことはできないことであった。口頭で表現される言葉「言われた言葉」の中に、パミラの本心は現れることはなかったのである。パミラとB氏の二人の間に、パミラの「本心・真意・真実」が介入するためには、彼女が自分と同じ目線で話し合える相

手があること、加えてパミラが自分の気持ちを隠すことなくそのまま表現できる場が必要であったのである。パミラにとって同じ目線で話し合える相手とは、すなわち両親であり、自分の「本心・真意・真実」を隠すことなく表現できる場こそが手紙であった。

しかし、パミラが手紙に自分の気持ちを書き連ねているだけでは何も事件は起こらなかったであろう。重要なことは、パミラの書いた手紙を、パミラが全く想定していなかった相手であるB氏が「盗み読み」をしたことである。この「盗み読み」という行為がなければ、パミラの「本心・真意・真実」をB氏が知ることは不可能だったのである。

この「盗み読み」という行為が、小説の舞台が18世紀であったからこそ行うことができた手段だということに注目したい。パミラはB氏のもとで働いていた頃から、手紙は下働きのジョンに両親のもとまで届けてもらっていた。もちろん、ジョンはB氏の手下であるから、ジョンがパミラの手紙をB氏へ横流しすることも容易であった。このように、18世紀イギリスでは手紙を宛て先へ送る手段が確立されていなかったため、B氏のような領主や貴族は、自分の手下に手紙を届けさせることが一般的だったのである。また、B氏の周到さは郵便局にまでおよび、郵便局の配達人も買収していたため、パミラが下働きのジョンに手紙を託さなかったとしても、B氏はパミラの手紙を簡単に手に入れていたであろうと推測できる。どちらにせよ、B氏はパミラの手紙を簡単に「盗み読む」ことができる状況にあったのである。

B氏にパミラとの身分を越えた結婚という決心を促すためには、B氏がパミラの手紙を「盗み読む」という行為が必要不可欠な要素であった。そしてパミラの手紙がB氏に対して効力を最大限に発揮するためには、パミラの手紙が、本心を隠す必要のない彼女の両親に宛てて書かれたものであるということがもっとも重要な点であると言える。「手紙の盗み読み」が小説内世界で効果を発揮するためには、パミラが書いた手紙が、彼女が両親・肉親にだけは打ち明けることができる赤裸々な本心を綴った手紙であり、かつB氏に読まれるとは思っていない手紙でなくてはならない。読まれることを想定していない相手（宛て先）に届いてしまった手紙の中に、「真実」が明らかにされていたのである。パミラが想定していない

相手（宛て先）とは、B氏だけではなく「編者」、そして読者も含まれる。B氏がパミラの手紙を「盗み読み」したからこそ、「編者」も読者もパミラの真実を知ることができたのだ。

パミラとB氏は直接の接触や対面、口頭での言表ではどちらも「本心・真意・真実」を表すことはできなかった。「言われた言葉」が真実を伝えることはなかったのである。その反面、パミラによって「書かれた言葉」が強力な効力を発揮して、真実を示す手掛かりとなる。「書かれた言葉」に「本心・真意・真実」が明示されるのである。

「書かれた言葉」の強さは、「言われた言葉」では越えられない障壁である身分の差を乗り越える大きな手掛かりとなった。B氏はパミラの容姿に関心を寄せていただけだったが、彼女によって「書かれた言葉」によって本物の恋に落ちる。「書かれた言葉」が誤った宛て先に届けられることによって、小説内世界に「真実」が開示されたのである。

---

## 第二節 なりすまし

ラクロ著『危険な関係』（1781年）は、リチャードソン著『パミラ』（1740年）からは40年、ルソー著『新エロイズ』（1761年）からは、20年が経過している。ラクロ自身が『危険な関係』の献辞や作品内に『新エロイズ』の一節や、ルソーの言葉を引用していることから推測できるように、ラクロはそれまでの書簡体小説のあらゆるテクニックを駆使して、『危険な関係』という書簡体小説を書き上げたと推測することができる。

『危険な関係』において、『パミラ』や『新エロイズ』とは異なる特徴は、「なりすましの手紙」が効果的に利用されている点を挙げることができる。「なりすましの手紙」は『パミラ』にも登場する。B氏がパミラになりすまして彼女の両親宛てに手紙を書くが、その効果は発揮されず失敗に終わる。また『新エロイズ』においては「なりすましの手紙」は登場しない。では、『危険な関係』において「なりすましの手紙」は、どのような効果を発揮しているのだろうか。

『危険な関係』は約七人の人物が交わす手紙で構成されている。

メルトイユ夫人はかつて自分を裏切ったジェルクール伯爵に復讐するために、彼の縁談相手に決まった15歳の少女セシルを結婚前に処女を喪失させ、墮落させようと企む。その際にメルトイユ夫人が共謀者としてセシルをそそのかすパートナーとして選んだのが、何人もの女性を翻弄してきたヴァルモンであった。ヴァルモンはメルトイユ夫人とともに、貴族の令嬢セシルをそそのかし、誘惑する。セシルはダンスニーという青年騎士に純粋な恋心を抱きつつも、ヴァルモンに身を許してしまう。セシルを愛するダンスニー、ヴァルモンに騙されつつも彼を愛してしまうツールヴェル夫人を巻き込み、メルトイユ夫人とヴァルモンのジェルクールに対する復讐劇は徐々に加速していく。

物語はセシルから友人へ宛てた手紙で始まる。セシルは修道院での教育を終え、結婚のために帰宅したばかりの15歳の世間知らずの少女である。彼女はダンスニーと出会い、恋に落ちる。セシルは初恋に戸惑いつつも胸躍らせながら、ダンスニーとの文通を始める。セシルがダンスニーに宛てて書くラブレターは、幼稚であるが素直で人懐こいセシルの性格がよく表れている。

私があなを愛していることはもうご承知なのですから、できるだけ長いあいだ私といっしょにいて下さいますでしょうね。私はあなたとごいっしょのときだけがうれしいのでございます。どうぞあなたも私と同じでいらっしゃいますように。

今でもまだ、あなたが沈んでいらっしゃるかと思うと悲しゅうございます。でもそれは、私のせいではありません。あなたがおいでになったら、すぐこの手紙をお受け取り下さるように私はハーブを弾きたいと申します。私にはそれよりいい方法がございません。

さようなら、ダンスニーさま。私は心からあなたをお愛し申します。そういえばうほど、うれしい気持ちがいたします。きっとあなたもよろこんで下さるものと信じております<sup>5</sup>。

この手紙を見ると、何も隠すことなくダンスニーへの好意の気持ちを表している。また手紙の受け渡し方法がハーブの弦に挟むという受け渡し方法も、誰に見つかるかわからないうえに、手紙がなく

なる可能性も高い心もとない方法であることがわかるであろう。

しかしセシルとダンスニーの文通は、セシルの母親であるヴォランジュ夫人に見つかってしまう。セシルは母親とともに、田舎のローズモンド夫人の家へと身を寄せることになり、セシルとダンスニーは引き離される。

セシルが自分の叔母の家にいることを知ったヴァルモンは、セシルを誘惑するために叔母の家へと向かう。ヴァルモンはセシルに近付く際、ダンスニーとの文通の仲介をしようと彼女に持ち掛ける。セシルはヴァルモンを信頼し、ダンスニーへの手紙を託そうとするが、ヴァルモンはセシルの油断について彼女の部屋に忍び込み、セシルの純潔を奪うという企みを実行する。セシルはダンスニーへの純愛を貫いていると自分では信じているが、ヴァルモンとの肉体上の関係にも魅力を感じるようになっていく。

メルトイユ夫人とヴァルモンの策略にまんまと引っかかってしまったセシルであったが、ダンスニーとの文通も続けていた。セシルがダンスニーに宛てて手紙を書いているところを、ヴァルモンは目撃する。そして、セシルの手紙の文章に茶々を入れる。そしてセシルとダンスニーの恋路を邪魔しようと思いついたヴァルモンは、セシルになりすましてダンスニーへの手紙を書くことをセシルに承諾させるのだ。以下の手紙はその思い付きを面白おかしくメルトイユ夫人に打ち明ける、ヴァルモンの手紙の一節である。

つまり昨日あの娘が彼に手紙を書いているところを見たので、まずその楽しい仕事をもっと楽しい仕事で邪魔してから、手紙を見せよと言いました。読んで見るといかにも冷たく堅いので、そんなことでは恋人を慰めることはできないと教え、私の口授で書き直すようにさせました。私はせいぜい娘のたわごとをまねながら、もっとたしかな希望によって青年の恋ごころを育てることに努めました。娘はこんなにうまく書いてうれしくてなりませんと言いました。そこで今後は私が文通を引き受けることになるでしょう。私もダンスニーのためには実にいろんな役をするわけです。友だちと相談役と恋女！<sup>6</sup>〔強調は論者〕

この手紙以降、セシルからダンスニーへ宛てた手紙は全て、ヴァ

ルモンによる「なりすまし」の手紙に取って代わる。ヴァルモンはセシルになりすまし、彼女に口授して書かせた手紙によって、ダンスニーの気持ちを高めていき、逢引への期待度を上昇させていく。ダンスニーはセシルからの手紙を彼女の「本心・真意・真実」だと思いつているが、それは実はヴァルモンがセシルになりすまして書いた手紙であって、セシルの本心ではなかった。セシルの「本心・真意・真実」は、ダンスニーにもそして読者にも隠されて見えなくなってしまうのである。

私はまんまと門番を味方に引き入れました。門番は、あなたがいらっしゃったときは、いつでも見ないふりをしてお通しすることを約束してくれました。いい男ですから十分信頼してよいのです。ですから、問題は家の中で人目につかないことだけですが、これは、晩、すっかり心配のなくなったときだけおいでになればなんでもありません。早い話が、母は、毎日外出するようになってからいつも11時に寝ます。だから十分暇はあるでしょう。

門番の話では、あなたがおいでになるときは、門をたたかずに、窓さえたたいて下さればすぐおあけするそうでございます。すると小さい階段があります。もっとも灯火のご用意はないはずですから、私は部屋の扉を細目にあけておきます。とにかくこれで少しはお見えになりましょう。とくに母の部屋の入口のところをお通りになるときは、音をたてないように十分気をつけてください。私の小間使の部屋の戸口は大丈夫です。起きない約束になっていますから。これもほんとにいい女中です。それから、お帰りになるときもまったく同じです。さあ、いらっしゃるかしら。

(中略)では明晩お待ち申します。あなたのセシルを悲しませたくなければきっといらしてね。

さようなら、あなた。心からの接吻をお送りしますわ<sup>7</sup>。

前に引用したセシルの手紙の文面からは想像もできないほど、流暢な語調で逢引の計画をダンスニーにけしかけているのがわかる。以前はダンスニーへの上手な手紙の受け渡し方法も思いつかなかっ

たことを考えると、随分小賢しくなり、逢引の計画も抜かりない。しかもダンスニーを挑発し、誘惑するかのような結びで手紙を終えている。しかもこの間は2ヶ月も経過してはいないのにも関わらず、それもそのはず、この手紙は誘惑の達人ヴァルモンがセシルになりすまし、彼女に口授して書かせた「なりすましの手紙」なのだから、ヴァルモンがセシルになりすまして書いた手紙によって、ダンスニーの恋心は募っていく。ダンスニーは本物のセシルと向き合うこともなく、彼の頭の中だけに存在する「妄想のセシル」と語り合っているにすぎない。しかもその「妄想のセシル」をせっせとこしらえたのは、ダンスニーからセシルを奪い、彼女と肉体関係まで結んだ、恋敵のヴァルモンなのである。恋人であるならセシルの語調の変化に気付いてもよいはずなのだが、ダンスニーがセシルの変化に気付くことはなく、彼はそのまま「妄想のセシル」との恋愛にのめり込んでいく。彼がここでセシルの変化に勘づいていれば小説の結末は変わっていただろう。

このようにしてセシルの手紙はヴァルモンの言葉に侵食されていき、本物のセシルの言葉を読むこと、彼女の「本心・真意・真実」の声を聴くことはもうできなくなってしまう。ヴァルモンによって故意に「書かれた言葉」によって、セシルの「本心・真意・真実」は隠蔽される。故意に「書かれた言葉」が小説内世界に過剰に溢れたために、真実を隠して見えなくしたのだ。その結果、セシルの「真実」と、ダンスニーが想像するセシルの「真実」に大きな亀裂とズレが生じる。その亀裂とズレを目撃し認識しているのは、セシルとダンスニーの二人の心のすれ違いを利用しようと企むヴァルモンとメルトイユ夫人、「編者」、そして読者である。

ヴァルモンの「なりすましの手紙」によって、ダンスニーのセシルとの逢引への期待と興奮はいやが上にも高まっていく。その期待度と興奮が高まれば高まるほど、セシルに裏切られたこととヴァルモンに担がれたことを知った時、ダンスニーの中で屈辱感と猜疑心は爆発し、ヴァルモンを決闘で殺してしまうまでに至る。「なりすましの手紙」、つまり故意に「書かれた言葉」によって綿密に隠蔽された「真実」が白日の下に晒された時、その隠されていた「真実」はより強力に小説内世界の人物を打ちのめすのである。

「書かれた言葉」が過剰に溢れる『危険な関係』という小説の中で、

セシルの「真実」がダンスニーと読者に隠蔽されてしまう。『危険な関係』は、小説内世界の中に偽りの言葉が溢れかえっている。ヴァルモンによるセシルになりすました手紙のほかにも、ヴァルモンがツールヴェル夫人を陥れるために書いた熱烈な愛情を模した手紙や、メルトイユ夫人とヴァルモンの騙し合いと探り合い。セシルと母親を仲違いさせるために、メルトイユ夫人が両人に書き送った偽りの慰めと助言の手紙等々。偽りの言葉の中に「真実」が埋没し、小説内世界の人物間の認識に亀裂とズレを生み、その亀裂は小説内世界の人物の信頼関係を徐々に崩壊させていき、最後には悲劇へと繋がる。

「書かれた言葉」によって真実が示されることになった『パミラ』とは反対の現象が、『危険な関係』では展開される。「書かれた言葉」と「偽りの言葉」が必要以上に溢れかえったことによって、小説内世界の人物の間の「真実」が隠蔽され、小説内世界の人物の間に亀裂とズレが生じ、小説内世界の人物がすれ違い、疑い合って、最後には壊滅していく過程を、「書かれた言葉」と「偽りの言葉」によって、読者は目撃することになるのである。

---

### 第三節 手紙の紛失

『新エロイズ』は、平民の青年サン＝ブルーと、貴族の令嬢ジュリの8年間におよぶ恋愛の物語である。物語はジュリが家庭教師をしているサン＝ブルーからジュリへ、愛の告白を綴った手紙から始まる。互いの気持ちを手紙で告白し合い、相思相愛となった二人は、ジュリの従姉妹のクレールの仲介もあり、身分違いの恋ながらも文通を続け逢引を行う。そして二人の関係は徐々に深くなっていく。

ジュリとサン＝ブルーの逢引はジュリが田舎町のクラランにある別邸に、従姉妹のクレールとともに赴いた際に始まった。サン＝ブルーを午餐会に招待した時、別邸の近くの林にて、ジュリはサン＝ブルーとの初めてのキスを味わった。クラランでのキスの後、ジュリは厳格な父と恋人との諍いを避けるため、サン＝ブルーをヴァレー地方のシオンへと旅立たせる。ジュリは父であるデタンジュ男爵にサン＝ブルーに勉強を教わっていることと、彼との交際を打ち明けようと考えていた。しかし、父は一人の友人を連れて帰ってきた。

後のジュリの夫となるヴォルマールである。父は貴族の身分を持つヴォルマールと一人娘のジュリを婚約させる。恋人との別離による悲しみと、望まぬ婚約への失望から、ジュリは病に倒れる。ジュリが亡くなると感じたクレールは、転地先よりサン＝ブルーを瀕死のジュリのもとへと呼び戻す。サン＝ブルーは弱り果てたジュリの姿を見て愕然としつつも、愛する人への欲望も隠せない。彼の欲望と情熱はジュリにも感染し、二人は初めて関係を結ぶ。

「全世界の人々がわたくしの過失を責めているのではありますまいか、わたくしの恥辱はあらゆる物に記されているのではありますまいか」<sup>8</sup>。純潔を失ったと感じたジュリは一時は強い自責の念に駆られ、クレールに宛てた手紙にその気持ちをしたためる。しかしその後悔も、強力な愛情に押し流されていく。恋人同士の初夜のきっかけを作ったとも言えるクレールは、ジュリとサン＝ブルーの関係を周囲に隠す共犯者となり、その後もジュリはサン＝ブルーと逢引を続ける。ジュリとサン＝ブルーは時には二人きりの授業中に、あるいは病気の見舞いを盾にして関係を深めていく。二人の逢引が続くにつれ、ジュリの中に新しい情熱と計画が生まれ、育まれていく。その計画は次のジュリからサン＝ブルーへの手紙の一節に垣間見ることができる。

それに、わたくしはもっと深く引き籠らなければならなくなるような時が来るかも知れません。そういう望ましい時がもう来ているのでしたらよいのですが！（中略）ああ、わたくしの過ちから償いの方法が生まれうるものならどんなに嬉しいでしょう！ 楽しい希望、いつかは……（中略）わたくしたちを不幸にしました恋はわたくしたちにその償いをしてくれるに相違ないということだけですの<sup>9</sup>。〔強調は論者〕

「償いの方法」や「楽しい希望」という言葉から、ジュリが何らかの方法によってサン＝ブルーと結婚もしくはそれに準ずるような関係になれる目論見があったように思える。「わたしの過ちから償いの方法が生まれうる」という言葉を考えてみる。ジュリの過ちとはサン＝ブルーとの恋と、それに関わる逢引である。そしてその過ちから生まれるもの、恋から生まれるものとは、すなわちサン＝ブル

一との子供なのではないだろうか。ジュリはサン＝ブルーとの子供の妊娠という既成事実を作ることによって、望まぬ結婚から逃れ、かつ愛するサン＝ブルーと正式に結婚できるように画策したとは考えられないだろうか。この計画を思いついた彼女は、それまで彼女を圧倒していたサン＝ブルーの官能的な情熱をも上回るような、激しい情熱に駆られていく。

わたくしはもっと楽しい境涯がわたくしたちに残されていることを希望しております。少くともそういう境涯がわたくしたちに授かるべきだという気がいたします。いまに運命はわたくしたちを迫害することに倦きるでしょう。わたくしの心の魂よ、わたくしの命の命よ、さあ、あなたご自身と結び合うためにいらっしやい。優しい愛の庇護の下にあなたの服従と犠牲とのご褒美をお受けなりにいらっしやい。快樂のさ中にありましても、快樂の最大の魅力は心と心の結びつきから生ずるということをお認めなりにいらっしやい<sup>10</sup>。

ジュリは上のような非常に情熱的で、濃厚な愛の手紙をサン＝ブルーに宛てて書く。そして家族の目を盗み、自室にサン＝ブルーを招くのである。純潔を失ったと思ひ悲嘆に暮れ、後悔の気持ちをクレールに対して漏らしていた時のジュリとは、まるで別人のような狂おしい愛情をこの手紙からは感じる。

それでは、ジュリの目論見は果たして実を結んだのであろうか。その答えが書かれていると思われる手紙が以下の手紙である。この手紙はジュリとサン＝ブルーの関係がジュリの父親に知られてしまい、二人が離れ離れになり、ジュリがヴォルマールと結婚した後に、ジュリからサン＝ブルーに送られた手紙である。

悲しいことに、わたくしはこれほど楽しい希望にも裏切られてしまいました。天は罪の中で抱かれた目論見を斥け給いました。わたくしは母となる名誉を受けるのにふさわしくなかったのです。

(中略) わたくしはこの望みが遂げられたように思いました。この思い違いこそわたくしの憾みの中で最も痛いものの源だっ

たのでして、愛は自然によって嘉よみせられましたけれど、そのためにかえって一そう残酷に運命によって裏切られたのでした。わたくしがおなかに持っておりました種ともろともに希望の最後の根拠がどういう事故に打碎うちくだかれたかはあなたもお知りになりました。この不幸はちょうどわたくしたちがお別れしておりました時に起ったのですが、それはまるで天がそのとき当然の報いとしてあらゆる苦悩をもってわたくしを圧倒なさり、わたくしたちを結び合せ得るきずなをすべて同時に断ち切ろうとし給うたようでした<sup>11</sup>。

このジュリからサン＝ブルー宛ての手紙には、何か不穏な空気とジュリの深い悲しを感じる。二人の間に何が起ったのであろうか。

「楽しい希望」という言葉は、前に引用したジュリからサン＝ブルーへの手紙の中にも出てきた言葉である。その引用の際に、論者は「楽しい希望」とは、妊娠のことではないかと推測した。その推測を裏付ける言葉が次の文に見られる。次文の「わたくしは母となる名誉を受けるのにふさわしくなかったのです」という言葉でわかるように、「楽しい希望」とはサン＝ブルーとの間の子供を妊娠すること、そしてジュリはそれを望んでいたということで間違いのないようである。

加えて「わたくしがおなかに持っておりました種ともろともに希望の最後の根拠がどういう事故に打碎うちくだかれたかはあなたもお知りになりました」という言葉から考えてみても、ジュリがサン＝ブルーの子供を妊娠していたことは確かのようなだ。しかしその後ジュリは何らかの事故に遭い、「種ともろともに希望の最後の根拠がどういう事故に打碎うちくだかれた」、つまり流産もしくは墮胎せざるを得ない状態に追い詰められたという衝撃的な事件が発生したことが推測されるのである。そして、その事件のことをサン＝ブルーも知っていたと考えてよいようだ。このことから次のようなことが読み取れるであろう。ジュリは彼女の思惑通りに、サン＝ブルーとの子供を妊娠した。それをサン＝ブルーも認識していた。そしてその妊娠という事実を根拠にして、ジュリがサン＝ブルーとの結婚を目論んでいたということが読み取れるのである。

しかしこの目論見はジュリの胎内に芽生えていたと思われる生命とともに、彼女のもとから永遠に去ってしまう。「わたくしたちがお別れしておりました時に起った」とあるように、この妊娠・流産事件は、恐らくサン＝ブルーがエドワードに伴われてパリに発った後から、ジュリがヴォルマルと結婚するまでの期間に起った事件だと思われる。しかし、ここで疑問が残る。ジュリがサン＝ブルーとの子供を妊娠しようと考えたことも、ジュリが自室にサン＝ブルーを招いた過程も、彼女の手紙に詳細に綴られていた。それなのに、ジュリとサン＝ブルーにとってもっとも重要だと思われる、子供の妊娠とそれに伴う流産の詳細を綴った手紙だけは、小説内から見つけることができないのである。妊娠・流産事件を語った手紙は一体どこに消えたのだろうか。

「編者」であり小説の作者でもあるルソー自身による「原著者註」において、「これから見ると、我々の手にない別の手紙があったにちがいない」とルソーが指摘しているように、ジュリが妊娠したことをサン＝ブルーに報告する手紙や、この事件を示唆するような手紙はこの小説内には見当たらず、明らかにされていない。この空白は何を現すのであろうか。

消えた手紙と、上の「編者」の註から、読者は以下のような複数の可能性を想像することができる。第一の可能性は、ジュリかサン＝ブルーが物的証拠になることを恐れて、事件の詳細を綴った手紙を焼却、または破棄してしまった可能性である。しかしサン＝ブルーはジュリからの手紙を一冊の書簡集にまとめてしまうような恋に狂った男である。そのような彼がジュリが自分の子供を妊娠したことを報告する歓喜の手紙や、墮胎もしくは流産の悲しみの手紙を破棄してしまう可能性は低いのではないだろうか。

第二の可能性は、ジュリの従姉妹のクレールが破棄した可能性である。ジュリは従姉妹であり親友であるクレールにサン＝ブルーからの手紙を預けていた。そしてクレールが結婚する際に、ジュリは彼女からその手紙を取り戻している。クレールは恋人たちの逢引をジュリや自分の親に隠し、二人の手紙の仲介もしていた。サン＝ブルーからの手紙を、クレールはジュリに全て返却したのだろうか。クレールは、ジュリの両親に真実が露呈することを恐れ、前もって重要な手紙を破棄してしまったとも考えられるのである。

第三の可能性は、ジュリの母親にジュリとサン＝ブルーの関係が明らかになった際に、母親が破棄した可能性である。ジュリの母親は厳格で身分制度という偏見に執着する夫を恐れながらも、ジュリには愛する人と結婚してほしいと願っていた。ジュリとサン＝ブルーを結婚させることはできなくても、せめて娘の妊娠と流産という事実が夫や周囲の人に発覚することを防ぐために、闇に葬ったのではないだろうか。

第四の可能性は、ジュリとサン＝ブルー両人が、互いの手紙をなくしてしまったという可能性である。しかしこの最後の可能性は、両人が偶然にも同じ事柄に関する手紙をなくすということは不自然であることから除外されよう。

それでは、ジュリの手紙を消してしまったのは誰なのだろうか。誰が衝撃的な事実を隠蔽したのだろうか。ジュリの共犯者は誰なのか。サン＝ブルーか、クレールか、それとも母親だろうか。

どの可能性にせよ、ジュリの妊娠・流産事件を明確に示す手紙を、この小説内から見つけることができないことは明らかである。手紙は「紛失」してしまったのである。それでは、この手紙の「紛失」とは何を表しているのだろうか。

それは小説内の登場人物にとって重要と思われる事実が、「編者」にも読者にもことごとく隠蔽され、もはや誰にも解明することができないということを表している。ジュリの妊娠と子供の死は永遠に隠されてしまった。そしてジュリが目論んでいたサン＝ブルーとの結婚という計画も、それを遂行しようとしたジュリのしたたかさや情熱も、後のジュリの徳の高い生き方に固執し、ヴォルマールとの間に生まれた子供を熱愛する一面は、この事件が彼女の性格形成に影響を及ぼしたのかもしれないという想像を読者に持たせる。「編者」にも読者にも与えられている手紙からは、ジュリの妊娠と流産という事実は暗示されているだけであり、「編者」も読者もこの事実を推測することしかできない。読者は謎を与えられるも、小説からは正しい答えを見つけることはできずに、読者は明示されている「真実」と、隠蔽された「真実」との間の空白地帯に宙吊り状態で放置され、謎解きはフラストレーションを抱えたままに終わる。書簡体小説における「手紙の紛失」は、まさしく小説内世界の真実の紛失そのものである。読者は想像することしかできない。作者であり

全ての「真実」を知るはずのルソーは何も教えてはくれないのだから、

- 1 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』31ページ、手紙その10、パミラから母への手紙
- 2 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』127ページ、手紙その30、パミラから両親への手紙
- 3 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』273ページ、日曜日 午後の日記
- 4 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』388ページ、月曜日の朝十一時の日記内における、B氏からパミラへの手紙の写し
- 5 ラクロ『危険な関係（上）』93～94ページ、第30信、セシル・ヴォランジュよりダンスニー騎士へ
- 6 ラクロ『危険な関係（下）』115ページ、第115信、ヴァルモン子爵よりメルトイユ侯爵夫人へ
- 7 ラクロ『危険な関係（下）』240～241ページ、第156信、セシル・ヴォランジュ（ヴァルモンによるなりすまし）よりダンスニー騎士へ
- 8 ルソー『新エロイズ（一）』155ページ、第一部、書簡29、ジュリよりクレールへ
- 9 ルソー『新エロイズ（一）』173～174ページ、第一部、書簡33、ジュリより〔サン＝ブルーへ〕
- 10 ルソー『新エロイズ（一）』244ページ、第一部、書簡53、ジュリより〔サン＝ブルーへ〕
- 11 ルソー『新エロイズ（二）』268～269ページ、第三部、書簡18、ジュリより〔サン＝ブルーへ〕

---

### 第三章 書簡体小説における虚実の曖昧性

---

#### 第一節 「編者」としての作者

さて、これまで分析してきた書簡体小説三作品におけるもっとも注目すべき共通点は二点ある。その共通点とは、どの作品にも「編者」の序文が冒頭に存在すること、そして「編者」による註釈が入ることである。この「編者」とは、「事件に関する諸々の手紙を手に入れ、それをしかるべく編纂した者」という役割を担っているようである。この「編者」という特殊な存在は一体何者なのだろうか。なぜ、作者はわざわざ「編者」として序文と註釈にのみ姿を現すのか。どのような理由があって、作者は「編者」という役割を設けたのだろうか。では三作品の冒頭を読み、「編者」についての分析に入ろう。まずひとつめは『パミラ』の冒頭である。

(実に興味深い出来事によって語られる) こうした内容が、賞賛すべきであり推奨に値するというのであれば、以下の書簡の編者は、ここに記されていることが真実であり、正直な心の現れであることに鑑みて、敢えてこう申し上げたい。上記の好ましき目的はすべて、以下のページの中でかなえられている、と。そして編者は、小著が広く読まれることを確信しているので、さらなる序文ないし弁明は不要かと思う。敢えて申し述べるならその理由は二つ。すなわち第一に、編者自身の強い気持ちは(というのも、以下の書簡にある数々の魅力的な内容を精読して、私は今までにないほど心を動かされたので)、本書に関心のない読者にも必ずや届くものと思うからであり、そして第二に、編者というものは一般に、自分の作品と向き合う作者には決してないような公正さをもって、適切に物事を判断すべきと考えるからである！

〔強調は論者〕

前の引用を見ると、「編者」は単なる書簡集の編纂者であって、小説の作者とは一線を画す存在であると自ら宣言しているように思える。そして「編者」がこの書簡集で伝えたいことは、この書簡集を読めばわかってもらえるだろうと、自らの意見はわざと述べないようになっているとも見受けられる。

では次に、『新エロイーズ』はどのように始まるのだろうか。

わたしがこれを全部つくったのか、この書簡全体は造りものであるか。社交界の人々よ、それがあなた方に何の関係があるう。たしかに読者にとっては架空の事に相違ないのだ。(中略) なお若干の場所の地形は大ざっぱに変えてあることを予告しておく。それは読者を一そう巧く欺くためでもあり、実のところ著者はそれ以上知らなかったからである。これがわたしの言い得ることのすべてだ、各人はお好きなようにお考え願いたい？

〔強調は論者〕

『新エロイーズ』の序文でも、「編者」は書簡集の編纂者という立場を誇示しており、しかも『パミラ』の序文の「編者」の言葉に比べて、「編者」としての存在感を強く現している。「読者を一そう巧

く欺くため」<sup>あざむ</sup>とあるように、作者としてのルソーの顔も垣間見えているようにも思えるが、やはり『新エロイズ』でも「編者」は、『パミラ』の「編者」と同じように、自らは単なる書簡集の編纂者であるという態度をとっている。

そして最後に『危険な関係』は、以下の序文から始まる。

読者諸君はこの著作、いな、むしろこの編著がなお大部に過ぎるとお考えになるかもしれぬ。しかしここに収めたのは、もとの往復書簡全体のうち、ごく少数の手紙を抜き出したものである。私はこの書簡を入手した人たちからその整理を命ぜられた。私はその人たちに出版の意向のあることを知っていたので、不必要と思われる部分はいっさい削除したこと、そのみを私の努力に対する報酬として要求した。事実私は、事件の理解、性格の発展に必要と思われる手紙だけを残すことに努めた。この些細な仕事のほかに、残した手紙を配列したこと（しかもそのためにはおおむね日付の順に従った）、まれに簡単な注を施したこと（これはおおむね引用の出典を示し、あるいは勝手に削除した理由を述べるだけの目的であった）を加えると、それがすなわち、私がこの著述にあずかった全部であって、私の使命はそれ以上に出てはいなかったのである<sup>3</sup>。〔強調は論者〕

上のように『危険な関係』の序文にも現れるのは、作者ではなく「編者」である。

『パミラ』、『新エロイズ』、『危険な関係』は、それぞれ上記に引用した「編者による序文」から始まる。どの序文も、自分は作者ではなくて、書簡集を編んだ「編者」でしかないという姿勢を強調していることがわかる。この三作品の作者は序文において、「自分はこの書簡集の編者である」という断りをわざわざ入れている。「編者」として手紙を配列、編集しただけであり、自分自身がこの書簡集の手紙全てを創作したわけではないと強調する。このような断り書きを冒頭に示すことによって、作者としての自分自身の存在感を希薄にする効果があると認めることができるだろう。そして作者は小説に語り手として君臨することはない。

また『新エロイズ』には、第二の序文として編者R（ルソー）と

友人Nとの対話文形式の序文が続く。そこではNはRに対して、『新エロイーズ』を読んだ印象を次のように語っている。

若干の手紙に関してなら僕にもよくこの問題が解けるだろう。それらは確かに君が書いたものだけでも、その他の手紙になるともう君が書いたらしくは思われなくなり、これほどまでに偽筆を弄し得るものかと僕は疑っているのだよ<sup>4</sup>。

上の引用を見ても、Nは『新エロイーズ』の手紙がルソーによる完全な創作なのか、それとも実際にジュリやサン＝ブルーのような人物が存在して、その人たちによって書かれた手紙なのか疑問を抱いたことがわかる。Nが「この手紙が本物か、偽物か」ということに強く疑問を抱いていたのと同じく、いやそれ以上に当時の一般読者は「本物か、偽物か」という疑問に悩まされ、小説内世界（フィクションの世界）と現実の世界との間に宙吊りの状態にされてしまったことだろう。

『パミラ』で扱われる手紙は、15歳の少女の手紙にしては非常に明解で機知に富み、表現も豊かである。たとえパミラが生来の聡明さを持っていたとしても、貧しい生まれでありながらたかだか3年程度の教育を受けただけの少女に大量の手紙を残せたものか疑問が残り、実在する書簡集として考えることは難しいだろう。『パミラ』の教訓的で明解な文章と膨大な数の手紙群や、『危険な関係』の「盗み読み」と「なりすまし」を駆使する技巧的な手紙の数々は、現代に生きる論者の目から見れば「よくできた偽の書簡集」であり「フィクション」であって、完全なる虚構と化している。しかし当時の読者はパミラの手紙も、『危険な関係』の登場人物の手紙も実在する本物の手紙だと思い、『危険な関係』の読者に至っては小説の登場人物を探し出そうとまでしたという。このことから容易に想像できるように、当時の読者にとって『パミラ』や『危険な関係』は現実の世界に存在する、実在する人物の書簡集であるという錯覚と混乱を引き起こしたと考えることができるのである。

また、ルソーは『新エロイーズ』の第二の序文において手紙についてこう記している。

実際に恋が書かせた手紙，真に熱狂的に恋をしている人間の手紙は冗漫であり，散漫であり，冗長，混乱，繰返しに満ちているだろう。彼の心は感情が溢れるばかりにみなぎり，いつも同じ事ばかり繰返し，決してすっかり言い終ったことがない。ちょうど不断に流れる泉が決して涸れないようなものだ。目ざましいところ，目立ったところは少しもない，言葉も，言い廻しも，文句も人の記憶に残らない。感心させられるところは一つもなく，打たれるところは一つもない。ところが魂の感動を覚える，なぜか分らぬが感動を覚える。感情の力が我々を打たぬとしても，その真実さが我々の胸に迫るのだ。このようにして心は心に訴えることができるのだ。〔強調は論者〕

この引用からもわかるように，手紙には書き手の感情が強く反映され，書き手の「真実」が現れるという意識がルソーの中に強く根を張っていたことがわかる。ルソーも手紙のそのような効果に期待したように，一般読者も同じように感じていたことだろう。現代よりも手紙という伝達手段が力を持っていた時代において，手紙と現実の世界（リアリティ）はより密接に繋がっていたはずだ。手紙は特定の人物間の私信の役割のほかにも，かつては新聞のように都市から地方へニュースを伝える報道の役割も担っていた。現代の手紙は私信という限られた役割しか持たないが，18世紀における手紙は公私どちらの情報伝達の役割も担っていたこと，新聞も電話も存在しない時代では手紙が唯一の連絡・伝達手段であったこと，「手紙は真実を伝えるもの」という概念が定着していたことを考え合わせると，18世紀において手紙と現実の世界は現代とは比較にならないほど，非常に強固な絆で結び合わさっていたと考えてよいのではないだろうか。手紙と現実の世界とを結ぶ絆が強ければ強いほど，読者は小説内世界の事件や登場人物をより現実の世界に引き寄せて想像してしまう。小説内世界の事件を実在したものだという錯覚を起こしたであろう。

本来，現実の世界に属する手紙というアイテムを，小説内世界（フィクションの世界）の中で活用することによって，現実の世界とそっくりな状況を小説内世界に再現することに作者たちは成功した。18世紀のヨーロッパにおいて，読者を魅了し小説内世界により引き込

むためには、手紙という現実の世界と強い絆で結ばれた装置を利用することが大いに役に立つことを、作者は理解していたのであろう。小説内世界の手紙群をより現実の世界の書簡集へと近づけるためには、作者は語り手として小説内世界に君臨することを拒否し、「編者」に姿を変え、敢えて読者から自身の存在を隠す必要があった。「小説のリアリズムとは、どういう類の人生を描いているかではなく、描き方にあるのである」<sup>6</sup>と、イアン・ワットが『小説の勃興』において言及しているように、書簡体という手紙を模した描き方によって、作者は18世紀ヨーロッパにおける現実感(リアリティ)を追求したのだと考えられるのである。

小説を書簡体という形式で表現することで、作者は読者の眼前に、自分たちが実際に生活している世界と、瓜二つの世界を作り出すことができた。それはまるで血が通っているかのような世界であり、虚構にしては現実感に溢れた世界であった。そして作者は書簡体という小説形式を利用するだけでなく、「編者」という装置を配することによって、現実の世界と虚構の世界との境界をより曖昧にさせ、読者を小説内世界に深く深く引き込み、感情移入させることに成功したと考えられるのである。それが18世紀に生きた小説家としてのリチャードソン、ルソー、ラクロの狙いだったのだ。

---

## 第二節 虚構と現実の境界をさまよう

第一節では、現実の世界と非常に強固な絆で繋がっていた手紙というアイテムを用いた、書簡体という語りの方を採用することによって、現実の世界と虚構の世界(フィクションの世界)との境界が曖昧になるという書簡体小説の特徴を論じた。これは書簡体小説における手紙と「編者」という装置が、小説という虚構の世界と、一般読者が生きる現実の世界とを分かち境界線を曖昧にして、ぼやかす効果があると言い換えてもよいだろう。

『パミラ』の中で、15歳の召使いの少女パミラは両親に宛てた手紙において、常に「真実」を伝えようとする。パミラの伝えなかった「真実」とは、偽りのない自分の気持ち、身の潔白と神への忠誠心、両親への愛情である。当初は両親にのみ伝わることを念頭に置かれた「真実」の言葉が、両親以外の人物、しかもパミラが全く想定し

ていなかった人物であるB氏へと伝わり、パミラの生涯を変える契機となる。

一方『危険な関係』では、ヴァルモンもメルトイユ夫人も偽りの言葉を駆使して、小説内世界に事件を巻き起こす。『危険な関係』の物語の最後において全ての手紙を手に入れるのは、ヴァルモンの叔母であるローズモンド夫人である。ヴァルモンは決闘で命を落とす際、ダンスニーに自分とメルトイユ夫人との往復書簡を渡す。その往復書簡を読んで事件の真相を知った後、ダンスニーはこの往復書簡をヴァルモンの唯一の親戚であるローズモンド夫人に送る。また、ヴァルモンによって騙され、狂死してしまうツールヴェル夫人も死の間際に、自分とヴァルモンとの間の手紙をヴォランジュ夫人に託す。その手紙も、ツールヴェル夫人の生前の友人であったローズモンド夫人のもとへと渡る。ローズモンド夫人のもとでヴァルモンとメルトイユ夫人のセシル誘惑事件に関する往復書簡、ツールヴェル夫人とヴァルモンの愛の応酬とツールヴェル夫人の敗北の記録、ダンスニーとセシルの文通と、バラバラだった手紙が少しずつ繋がり、初めて事件の全貌が明らかになるのである。偽りの言葉に溢れた手紙が徐々に集まり、最後にはひとつの大きな「真実」を読者の目の前に展開させるのである。

『パミラ』に見られる手紙は一通一通が、パミラの「真実」を示していた。パミラがB氏の暴挙に屈することなく書き続けた手紙は、彼女の「真実」に溢れていた。その「真実」がB氏を導き、改心させるのである。「手紙は真実を伝えるもの」という概念を小説に仕立てたものが『パミラ』であると考えてもよいのではないだろうか。作者のリチャードソンも序文において、「ここに記されていることが真実であり、正直な心の現れであることに鑑みて」<sup>7</sup>と書いているように、リチャードソン自身も手紙と「真実」の密接な繋がりという関係性を重視していたと見ることができる。手紙の中に「真実」が明らかにされているのであれば、その「真実」を横取りすることになる「盗み読み」という行為そのものが特定の人物の「真実」を手に入れるための手段になるのである。

一方『危険な関係』は、小説内の手紙が全て「真実」を伝えるとは限らないという可能性を読者の前にちらつかせる。作者ラクログが序文において「ここに現された感情は、ほとんど全て偽った、また

は隠された感情であるから、たかだか好氣的な興味をそそるにすぎない<sup>8</sup>と述べていることからわかるように、手紙が「真実」を表現するという概念や、「書簡が書き手の内面生活をもっとも直接的、実質的に証す」<sup>9</sup>ものであるという、読者が抱く手紙に対する先入観や信頼を揺るがし、覆そうとしているとも見ることができる。ラクロは手紙の持つ「真実性」だけでなく、「虚構性」をも表現することを目指したのではないだろうか。『危険な関係』の中で、メルトイユ夫人はヴァルモンへ宛てた手紙の中でこう語る。「手紙によって感動させたところでなんになりましょう。相手の感動につけこむにしても、自分がその場に居合わせなかったら仕方ありません」<sup>10</sup>。メルトイユ夫人は手紙の中の「書かれた言葉」の弱さや曖昧性を、しっかりと認識していたのだ。彼女と同じくラクロも、手紙の「真実性」や、「書かれた言葉」の脆さや弱さを認識しており、それを小説内で表現したかったのではないだろうか。しかし皮肉なことに、ヴァルモンとメルトイユ夫人の陰謀は、一通一通では真実か偽りか判断できぬ手紙でも、それが空白なく並べられ白日の下に晒されると、ひとつの大きな「真実」を露見させてしまうことになってしまったのである。

『パミラ』はひとつひとつの手紙がパミラの「真実」を示し、それが集まり並べられた物語も、「真実」を示す物語であった。しかし『危険な関係』は、ひとつひとつの手紙には偽りの言葉が溢れているとしても、それが集まればひとつの「真実」を表してしまうという、嘘をひっくり返せば「真実」が現れるというような『パミラ』とは正反対の方向へと読者を誘導する。しかし『危険な関係』においても、手紙がしかるべき順序に並べられると、ひとつの真実を形作るという、手紙と「真実」の切り離せない関係が浮き彫りにされるのである。

手紙がどのような形であれ「真実」あるいは「虚構」と結び合わされているとしても、そのどちらにも当てはまらずに虚実をぼやかしてしまう場合がある。『新エロイズ』は、小説内世界の手紙を「紛失」させることで、小説内世界で発生した事件の詳細を隠蔽することに成功している。『パミラ』は「真実」を表し、『危険な関係』は「真実」と「虚構」の両方をも表現することに成功したが、果たして『新エロイズ』ではどうだろうか。

『新エロイーズ』の中でもっとも重要な特徴は、「手紙の紛失」が事実の空白を生み出すということである。事実の空白ということは、その小説内世界の事件の真相を曖昧にし、ぼやかしてしまうということである。ジュリは本当に妊娠をしていたのか、それをサン＝ブルーは認識していたのか、ジュリとサン＝ブルーの子供は亡くなったのか、それを知っているものはいたのか、一体いつ・どこでその事件は起こったのか、それはどのような事件だったのか云々。この事件については、後日談を語るジュリ以外の小説内世界の人物は誰もが沈黙を守る。読者は不自然な手紙の空白に気付く、ジュリの後日談によってその事件の内容を推理するしかないのである。

「語り手は依然として主人公でありながらも、それと同時に、別の誰かでもある。つまり、その日一日の出来事はすでに過去に属しているのだから、そのあとで『視点』が変化したということもありうるわけだ」<sup>11</sup>と、ジェラルド・ジュネットが書簡体小説の特徴を述べているように、通常手紙というものは、書き手がその日その時に記録し伝達する手段であって、回想録ではない。しかしジュリがサン＝ブルーに妊娠・流産事件の顛末を手紙で語った時には、その事件が発生してからだいぶ時間が経過し、ジュリがヴォルマールと結婚した後でのことだった。そしてジュリのその告白を読んで初めて、読者はジュリが妊娠したものの子供を産むことはできなかったという事実直面し、愕然とするのである。

ジュリの妊娠・流産事件の最中に、このことが書かれていたと思われる手紙が『新エロイーズ』からはごっそりとなくなっている。「編者」も原著者注において、「これから見ると、我々の手にない別の手紙があったにちがいない」<sup>12</sup>と、「編者」自ら手紙の「紛失」について言及し、読者に推理のきっかけを与えている。『新エロイーズ』では、書簡体小説において語り的手段となる手紙が消失・紛失するという、語りの欠如が発生しているのである。その後もジュリ以外は誰も、そのことには触れない、語らない。事実の空白地帯が生まれる。その事実の空白地帯には、読者の疑惑と想像と推理だけが渦巻き、読者は小説内世界の事実すら把握することが難しくなる。小説内世界の人物はその後も滔々と物語を語り続けるが、読者はそのまま空白地帯に取り残されてしまう。

『新エロイーズ』では「手紙の紛失」という手段を用いて、読者を

小説内世界の空白地帯という落とし穴に突き落とす。読者は小説内世界の事実の把握すら不可能な状態に陥り、小説内世界の虚構と現実の境界がぼやけた空間に、ただ一人置いてけぼりにされるのである。

今まで見てきたように、書簡体小説には様々なテクニックがあることがわかった。読者と小説内世界の人物を「真実」へと導く、「盗み読み」、読者と小説内世界の人物を「真実」を隠蔽することで「真実」から遠ざける、「なりすまし」。そして、読者を小説内世界の何もない空白地帯へと連れ込む「手紙の紛失」。

『パミラ』、『新エロイーズ』、『危険な関係』という三作品は、書簡体小説という形式で構成されたうえ、「編者」という特殊な存在を有する。書簡体小説特有の手紙文という形式と、「編者」という装置が、読者の住む現実の世界と小説という虚構の世界（フィクションの世界）との境界を曖昧にしてしまうという「外側に向かう」曖昧性。そして、それぞれの書簡体小説に仕組まれた「盗み読み」、「なりすまし」、「手紙の紛失」というトリック（罠）が、読者を小説内世界の虚実すら見失うようにさせる「内側に向かう」曖昧性。このふたつの虚実の曖昧性を含有した小説形態こそが、書簡体小説（「編者」が存在する）であり、この「外」と「内」の虚実の曖昧性が書簡体小説の最大の特徴なのだと言えよう。

書簡体小説の持つ二重の曖昧性、小説の外側の世界である現実の世界にまで広がりながらも、小説内世界の内側に解けない謎を隠し持つという、重層的な虚実の曖昧性が、読者に錯覚を起こし、読者を混乱させ、なおかつ読者を魅了させる理由なのである。

- 1 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』4ページ、編者による序
- 2 ルソー『新エロイーズ（一）』11～12ページ、序
- 3 ラクロ『危険な関係（上）』7ページ、編者序
- 4 ルソー『新エロイーズ（一）』39ページ、第二の序文
- 5 ルソー『新エロイーズ（一）』20ページ、第二の序文
- 6 イアン・ワット『小説の勃興』14ページ
- 7 リチャードソン『パミラ、あるいは淑徳の報い』4ページ、編者による序
- 8 ラクロ『危険な関係（上）』9ページ、編者序
- 9 イアン・ワット『小説の勃興』265ページ
- 10 ラクロ『危険な関係（上）』101ページ、第33信、メルトイユ侯爵夫人よりヴァルモン子爵へ
- 11 ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール 方法論の試み』
- 12 ルソー『新エロイーズ（二）』361ページ、原著者注35

---

## 終章 これからの課題

今まで、書簡体小説の定義とその特徴の概観、『パミラ』、『新エロイーズ』、『危険な関係』という18世紀書簡体小説における代表的な三作品から、「盗み読み」、「なりすまし」、「手紙の紛失」という書簡体小説特有の表現方法、「編者」としての作者の存在意義、書簡体小説の持つ虚実の曖昧性を分析してきた。現段階で論者が論証することができることは、全て論じたつもりである。

最後にこれからの課題および改善点を数点挙げておきたい。

まず三作品を原文で読解・分析したいということである。三作品を日本語訳で読解・分析するだけでも四苦八苦したのだが、原文で読解・分析することによる新たな発見に期待している。日本語訳では表現しきれない小説内世界の人物関係の詳細を理解することや、登場人物の手紙における文章の書き方やくせ等の細部を知ること、より細かいテキストの分析ができるであろう。また、日本語訳では理解することのできなかつた書簡体小説の虚実の曖昧性を見つけることもできるはずだ。

また今回、書簡体小説の虚実の曖昧性を取り上げたが、「編者」と作者の関係性のほかにも、「編者」と読者の関係性、「編者」と小説内世界の関係性も、リチャードソン、ルソー、ラクロ、18世紀書簡体小説の作者たちの人生やその他の作品群、18世紀の社会情勢も含めてより深く追求していきたい。そして、18世紀の作品だけでなく、書簡体小説が時代とともにどのように変化していったか、また時代による書簡体小説の隆盛にも注目して、文学史の中での書簡体小説の位置や必要性にまでおよぶような考察をしていきたい。

上のような多くの課題を克服し、より書簡体小説に対する理解を深めることができるよう精進していきたい。そして私の論文や情報の発信によって、一人でも多くの方が書簡体小説に対する警戒心やとっつきにくさを少しでも軽減して、興味・関心を抱き、書簡体小説を手にとってもらえるよう、貢献できれば幸いである。

## [参考文献]

- アペラール, ピエール&エロイーズ・アルジャントゥイユ, 2009, 峯掛吉彦・横山安由美訳『アペラールとエロイーズ 愛の往復書簡』岩波書店.
- 有島武郎, [1915]1934, 『宣言』岩波書店.
- 市川通雄, 1978, 『西鶴の書簡体小説』『文学研究』(47): 36～45
- ヴォルテル, [1734]1951, 林達夫訳『哲学書簡』岩波書店.
- 倉持三郎, 1969, 『書簡体小説の方法——間接伝達の効果』『文学藝術』(2): 60～68
- 桑瀬章二郎編, 2009, 『書簡を読む』立教大学文学部人文研究センター.
- ゲーテ, ヨハン・ヴォルフガング・フォン, [1774]1951, 竹山道雄訳『若きヴェルテルの悩み』岩波書店.
- 小島信夫, 2007, 『小説の楽しみ』水声社.
- 新保弼彬, 1974, 『J.Engelの小説論と書簡体小説『ヴェルテル』』『独仏文学研究』(24)
- 惣谷美智子, 1995, 『オースティン『レイディ・スーザン』——書簡体小説の悪女をめぐって』英宝社.
- 高橋安光, 1995, 『手紙の時代』法政大学出版.
- ドストエフスキー, フョードル, [1846]1969, 木村浩訳『貧しき人びと』新潮社.
- シーシキン, ミハイル, 2012, 奈倉有里訳『手紙』新潮社.
- シャルチェ, ロジェ編, 1992, 水林章・泉利明・露崎俊和訳『書物から読書へ』みすず書房.
- ジュネット, ジェラルド, 1985, 花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール 方法論の試み』水声社.
- 中川信, 1976, 『書簡体小説』『フランス文学講座 第一巻 小説Ⅰ』大修館書店
- 夏目漱石, [1914]1952, 『こころ』新潮社.
- バフチン, ミハイル, 1995, 望月哲男・鈴木淳一訳『ドストエフスキーの詩学』筑摩書房.
- 星名定雄, 1982, 『郵便の文化史——イギリスを中心として』みすず書房.
- 湊かなえ, 2010, 『往復書簡』幻冬社.
- モンテスキュー, シャルル・ド, [1721]1976, 小松茂美訳『ベルシア人の手紙(上)(下)』岩波書店.
- ラクロ, コデルロス・ド, [1782]1965, 伊吹武彦訳『危険な関係(上・下)』岩波書店.
- リチャードソン, サミュエル, [1740]2011, 原田範行訳『パミラ, あるいは淑徳の報い』研究社.
- リチャードソン, サミュエル&ローレンス・スターン, 1972, 海老池俊治・朱牟田夏雄訳『筑摩世界文学大系21 リチャードソンスターン』筑摩書房.
- ルソー, ジャン=ジャック, [1761]1960, 安土正夫訳『新エロイーズ(一・二・三・四)』岩波書店.
- ワット, イアン, 1999, 藤田永祐訳『小説の勃興』南雲堂.
- ロスタン, エドモン, [1897]1951, 辰野隆・鈴木信太郎訳『シラノ・ド・ベルジュラック』岩波書店.